

初めての聖書のお話

1. 聖書の神とは、どういう神ですか。
 - (1) 天地万物をお造りになった創造主なる神です（創世記 1 章）
 - (2) 私たち人間も、神がお造りになりました（創世記 2 章）

2. 神が造ったのなら、どうして戦争や争いのない世界にしてくれないのですか。
 - (1) 戦争や争いが起きるのは、争ってでも手に入れたいという欲望が人の内側にあるからです（ヤコブ 4 : 1）。地上に平和な世界をもたらすためには、まずそこに住む人々の内側を新しくする必要があります（エレ 31 : 33、エゼ 36 : 26~27）。
 - (2) 内側が新しくされた人々を集めたうえで、神は、将来、この地上に正義の国を建て、全世界を平和のうちに支配します（イザヤ 51 : 3~5）。
 - (3) この平和と正義の国のことを、「神の国」（マルコの福音書 1 : 15）と呼びます。また、福音書時代のユダヤ人はみだりに神の名を唱えてはならないという律法に照らして、「神」ということばすら避けて、「天」と言い換え、「天の国」（マタイの福音書 3 : 2）と呼びました。
 - (4) この神の国の王となる人物を、メシアと呼びます。メシアとは、ヘブル語で「油注がれた者」という意味です。油は神の霊を象徴し、王となる人物は頭に油を注がれることで、神の霊がその人の上にとどまり、王として任命されたことを意味します。メシアをギリシヤ語でいうと、キリストです。
 - (5) 聖書が教える「福音・ふくいん」（良い知らせ）とは、神の国が近づいたという知らせです。そして、その国に入れるように準備しなさいというメッセージです。福音のことを、「神の国の福音」（ルカの福音書 4 : 43）というのは、そのためです。

3. キリスト教の福音というと、死んだら天国へ行けますという意味で理解していましたが、それは違うのですか。
 - (1) 違うというよりも、理解が半分という段階かと思えます。
 - (2) 「天国」というと、一般的に連想されるのは、神がおられる天上の世界のことです。たしかに、信仰者が死ぬと、その靈魂は天上に引き揚げられます（Ⅱコリ 5 : 8）。その点では、葬式のときに、「天に召された」というのは正しいです。
 - (3) しかし、福音、良い知らせというのは、靈魂が靈魂のまま終わるのではなく、再び体を受けて、それも病気や死のないすばらしい体を受けて復活するという喜ばしい知らせなのです。信仰者はその復活の体になって、将来この地上に到来する神の国に入るのです。

4. そういう神の国が来るということを、どうして信じることができるのですか。
- (1) イエス・キリストが復活し、神の国に入るための復活のからだがあることを証明したからです（I コリ 15：20～21、ロマ 1：4）。
 - (2) イエス・キリストが現れてどのようなみわざをするか、そのことが旧約聖書で預言されていました。新約聖書は、そのとおりのことが起きたのだと証言する記録です。
 - (3) また、聖書は、イエス・キリストが今、現在、天上でどのような働きをしておられるか、を教えてください。また、将来地上に戻られて、神の国をどのように建てられるのかを預言しています。過去に起きた預言がすべて成就したのですから、将来に関する預言もまた必ず成就すると確信できます。
5. イエスは十字架で処刑された罪人ではありませんか。そのような人を救い主として信じるとはどういうことですか。
- (1) 処刑前に、イエスは、2つの裁判にかけられました。本来であれば、いずれの裁判でも無罪でした。
 - (2) まず、ユダヤ人の裁判では、イエスは旧約聖書が預言してきたメシアなのかどうか、この点が争点となりました。
 - ① イエスが3年半にわたって多くの奇跡を行ったことは周知の事実でした。
 - ② これを否定することができなかったユダヤ人指導者たちですが、彼らはイエスを最初から疑って見ていました。それは、イエスが貧しい大工の子であり、正統なユダヤ教の教育を受けていなかったからです。ユダヤ人指導者たちは、イエスを悪霊に憑かれた魔術師であると宣伝しました。しかし、イエスをメシアとして認める動きがユダヤ全土に広がっていきました。
 - ③ ユダヤ人指導者たちは、これ以上イエスの宣教活動を放置すると、民衆がイエスをメシアとして認め、イエスをユダヤの王に擁立して、ローマへの反乱が起きると危惧しました。ユダヤ人指導者たちの中で、特に権力上層部にあった人々は、復活も神の国も信じていなかったのです。神殿祭儀のトップである大祭司も信じていませんでした。
 - ④ イエスの逮捕は、民衆を刺激しないように昼間を避け、イエスが側近の弟子たちと過ごしている夜の時間帯と場所を選んで、実行されました。その手引きをしたのが、十二弟子のひとりのユダでした。
 - ⑤ ユダヤ人の裁判は、大祭司を議長とし、祭司長や民の長老たちによって構成される自治会議サンヘドリンにおいて行われました。祭司長たちは、にせの証人を準備していました。偽証者がたくさん出て来ましたが、言い立てることがあまいで一致せず、イエスの罪状を立証することはできませんでした。
 - ⑥ 最後にふたりの者が「この人は、『わたしは神殿をこわして、それを三日のうちに建て直せる』と言った」（マタイ 26：61）と証言しました。これは半分言

いがかりのような証言でした。裁判から3年前、イエスがエルサレムの神殿から商売人たちを追い出して神殿域をきよめたときに、ユダヤ人指導者たちがイエスにメシアとしてのしるしを見せるよう求めました。そのとき、イエスは彼らにこう言ったのです。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう」(ヨハネ2:19)。イエスは、自分が神殿をこわすとは言わなかったのです。

- ⑦ 大祭司は、イエスに弁明を求めました。しかし、イエスは黙っておられました。イエスはご自分を擁護するような弁明は、第一の裁判でも、次の第二の裁判でも、一切しませんでした(マタイ26:62~63、27:14、イザヤ53:7)。
 - ⑧ ついに大祭司はイエスに命じました。「私は、生ける神によって、あなたに命じる。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」これは、神の名によって大祭司が命じたことですから、ユダヤ人であれば律法に照らして、従う義務があります。イエスは「あなたの言うとおりで」と答え、さらに「なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るようになります」と言いました。
 - ⑨ 「力ある方」とは、神のことです。「右の座に着く」とは、同等の地位にあるという意味です。これを聞いた議長の大祭司は、イエスが自分を神と同等にしたとして、証人不在のまま(ルカ22:71)、冒とく罪にて有罪とすることを自治会議に諮り、出席者の全員一致(マルコ14:64)により有罪を決定しました。(マタイ26:65~66)
 - ⑩ 証人なしで有罪死刑とするのは、律法違反でした(申命記19:15)。ユダヤ人にとって最高規範である律法の規定を無視して有罪の決定をしたのです。また、ユダヤ人の慣例では「全員一致」は無効でした。健全な意思決定のプロセスでは全員一致はあり得ないという、良き慣例は、このとき無視されました。
 - ⑪ 旧約聖書の預言には、メシアは「神であり、同時に人である」というものがあります(イザヤ9:6)。神が人となって現れる、という預言です。その点からも、イエスがメシアであれば、神性宣言をすることは、あり得ることでした。また、「人の子が天の雲に乗って来る」というのは、メシア預言の一節をそのまま言ったものでした(ダニエル7:13)。
- (3) サンヘドリンはイエスを有罪としましたが、当時のユダヤ人自治会議には死刑執行権がなく、ローマ法による裁判を受ける必要がありました。裁判官はローマ帝国から派遣されている総督です。ユダヤ人指導者たちはサンヘドリンでの有罪決定後、ただちにイエスをローマ総督に訴えました。
- ① 「ユダヤ人の王を自称し、多くの人々を惑わし、ローマに税金を納めることを禁じた」という罪です。ここで証人に立つはずだったのが、イエスを裏切った

十二弟子のひとりユダでした。しかし、ユダは裁判直前に裏切りを後悔して自殺してしまい（マタイ 27：3～5）、立証能力のある証人は不在となりました。

- ② ローマ総督は、ユダヤ人の宗教や律法にも詳しい人でした。ユダヤ人指導者たちがイエスをねたんで、訴えてきたという背景を見抜いていました（マタイ 27：18）。そこで、総督は何度もイエスの無罪宣告をしようとしたのですが、ユダヤ人指導者たちは民衆を扇動し、イエスを十字架にかけるよう要求させました。
- ③ ローマ総督の職務は、赴任地の治安の確保です。騒動や反乱が起きることは自分の地位を危うくする問題でした。ローマ総督は、民衆に暴徒化の兆候があったので（マタイ 27：24）、やむなくユダヤ人指導者たちの要求に従ってイエスの処刑を認めました。
- (4) イエスは、法的に無罪であっただけではありません。イエスは、旧約聖書の律法に照らして、どの規定にも違反したことがない人でした（I ペテロ 2：22）。イエスは、神の基準に到達した義人でした。そのイエスが十字架にかかって死ぬことは、たしかにユダヤ人指導者たちが画策したことではあったのですが、真に無実の人が命を差し出すということ、神は人類の救いのために用いられました。メシアが人類すべての罪を背負うのです。神は、罪なきお方を私たちの罪のための身代わりとされました。

6. 「私たちの罪」とは、何のことですか。私は曲がったことはしてこなかったつもりです。

- (1) 「私たちの罪」とは、第一に、神を神として認めない生き方そのものを指します。
 - ① 人は天を仰ぎ見るとき、神がおられることを感じます。何か危険が迫ると、思わず、「神様、助けて」と心の中で叫びます。人は本来、神を知っています。しかし、その神を神としてあがめず、感謝もしません（ロマ 1：19～21）。
 - ② イスラエル民族（ユダヤ人）の場合は、この罪が他の民族以上に際立っています。彼らは、神が全人類の中から一人の人アブラハムを選び、その子イサク、孫のヤコブへと続き、そのヤコブの12人の息子たちを十二部族の族長として、神が育てた民族です。神は彼らに神のことばを託し、聖書を記録させました。にもかかわらず、彼らの歴史は、真の神を捨てて偶像崇拝をする。あるいは、心から神を喜び、神に感謝するというのではなく、ただ規則重視で権威主義に陥るといったものでした。神は何人もの預言者を遣わして戒めましたが、彼らは、聞く耳を持たず、多くの預言者たちを殺してしまいました。ですから、ユダヤ人の場合、「私たちの罪」というと、真の神を明確に知らされながら、その神を神としてこなかったという民族の歴史的な罪を意味します。その民族的罪を悔い改めて、神の前にへりくだりなさい、というのが、福音書の最初に

よく出て来ることば、「悔い改めなさい」ということばです。これは、ユダヤ人たちにその民族的罪を神の前に告白し、神の国に入る準備をなさい、という意味なのです（マルコ 1:4~5、15）。

- (2) 「私たちの罪」の第二は、個人的な汚れた思いや外側に現れた過ちです。
- ① 人が神を神として認めずにいると、その内側には良くない思いが満ちるようになり、してはならないことをするようになります（ロマ 1:28~31）。神の前にへりくだると、どんなに立派な生活をしてきた人でも、自分の内面にある傲慢さや汚れた思いに気づきます。
- ② 次が、人が犯す、具体的な個々の罪、過ちです。これは人の内側に罪の性質があるから、それが具体的に外側に出てくるものです。人により、その出方は違いますが、神の基準に達することのできる人は誰もいません（ロマ 3:9~20）。
- (3) イエスは、ユダヤ人として生まれて、イスラエル民族の「民族的罪」を背負いました。また、人として、すべての人類の罪を背負いました。すべての罪とは、十字架以前の過去の罪も、十字架以降の将来の罪も、すべてです。

7. イエスが人類すべての罪を背負ったとのことですが、それを信じるだけでいいのですか。何ともうまい話に聞こえます。

- (1) イエスが私たちの罪のために十字架で死んでくださったこと、イエスが墓に葬られたこと、そして、イエスが三日目に復活したことを信じるなら（I コリ 15:1~4）、その人は神の前に、罪なき者＝義人と認められます（ロマ 3:24）。そして、義人と認められた人だけが神の国に入ります。これを、「救われる」と言います（I コリ 15:2）。
- (2) 救いは、その人の行いによらず、神の恵みにより、信仰を通して、受け取ります。それ以外に神の国に入る方法はありません。自分の行いで神の基準に達することができる人は一人もいないからです（ロマ 3:22~24、ガラ 2:16、エペ 2:8）。

8. 復活というのは、弟子たちが考え出した作り話、あるいは、そうであつたらよいという願望から出たことではないのですか。

- (1) 人は自分の嘘のために死ぬことはできません。・・・弟子たちの数は500人以上にもなります（I コリ 15:6）。数百人の人々が一致して作り話を本当だと宣伝することは、まず不可能です。仮にそれができたとしても、彼らには何の利益もないのです。利益を得るところか、イエスの復活を宣べ伝えるたびに、迫害を受け、ユダヤ人社会から追放されて経済的社会的基盤を失って生活に困窮しました。さらに命まで危険になりました。弟子たちの中核であった使徒たちは、ほとんど全員が殉教の死を遂げていきました。ひとりかふたりの狂信者ならあり得るかもしれませんが。しかし、これだけ多くの弟子たちが数十年にわたり、激しい迫害の中で殉教し

ながらも、イエスの復活の証人（使徒2:32）であり続けたということは、復活が作り話ではなく事実であったからです。

- (2) そもそも弟子たちは復活を期待していませんでした。・・・イエスは十字架にかかる前、数回にわたり、自分は死んで3日目に復活すると弟子たちに告げていましたが、弟子たちにはメシアが死ぬこと自体、受け容れることができずにおりました。そして、その予告のとおり、イエスは逮捕され、十字架刑に処され、その遺体は墓に葬られてしまいました。弟子たちは放心状態で、誰一人、イエスが復活するなどと思いませんでした。むしろ、ユダヤ人指導者たちの方がイエスの予告について心配をしていました。もし弟子たちがイエスの遺体を隠して、イエスは復活したと宣伝したら、ますます世情が混乱する、と恐れたのです（マタイ27:63～64）。
- (3) 墓の前ではローマ兵が見張りをしました。・・・そのような心配のため、ユダヤ人指導者たちは、ローマ総督に要請して、ローマ兵によって墓を封印し、見張りをしてもらいました。三日目の朝、天からまばゆい光が下ったと見ると、たちまちに地震が起き、墓の入り口の石は、封印のついた縄を引きちぎってころがりました。見張りをしてきた屈強なローマ兵たちも、恐れあまりに硬直して気を失ったのでした。気を取り戻したローマ兵たちはユダヤ人指導者たちのもとに駆け付け、事の次第を報告しました。ユダヤ人指導者たちは、この異常な出来事を隠蔽し、ローマ兵たちに命じて、見張りが眠っている間に弟子たちが来てイエスの遺体を盗み出したと宣伝させました（マタイ28:2～4、11～15）。
- (4) もし、イエスの復活がなかったとしたら、考えられるのは、次の四つです。
 - ① イエスは、仮死状態であった。墓から自分で出てきて、どこかへ行ってしまった。それ以来、行方不明である。→ 十字架上で死亡確認済み。念押しで槍で脇腹を突き刺された。そのとき大量の血と水が流れ出した。それでも生き返ったとしても、重傷を負っていた身で出入り口の石をころがして出て来るのは不可能。出て来たとしても番兵に見つかる。
 - ② ユダヤ人指導者たちが隠した。→ 弟子たちがイエスの復活を主張したときに、その遺体を出してきて、作り話であると反論できたはずである。
 - ③ 見張りのローマ兵たちが眠っている間に弟子たちがイエスの遺体を盗み出した。→ 眠っていたなら、犯人の顔も見えていないはずで、弟子たちであったとわかるはずがない。見張りの兵が眠るのは、軍律違反で死刑。しかし、ローマ兵たちは死刑になっていない（マタ28:14）。
 - ④ 動物がイエスの遺体を引き出した。→ 遺体を巻いていた布がきれいにそのまま残っていた（ヨハネ20:6～7）。動物が侵入して遺体を引き出していったという状況ではない。

9. 私たちの罪のために死んだということ、復活したということ、その二つは重要だと思いますが、墓に葬られたことを信じる、というのはどういう意味ですか。
- (1) イエスが墓に葬られたというのは、3つの意味があります。第一は、イエスの無罪宣告です。・・・十字架刑は見せしめの刑です。死んだ後もそのまま遺体は放置されて、墓に葬ることは許されません。ローマ総督がイエスの遺体を引き渡して墓に葬ることを認めた、ということは、無罪宣告と同じことです。他方で、旧約聖書の律法からいうと、十字架のように木にかけられるのは呪われた死に方です（申命記 21：23）。イエスは、無罪でしたが、私たちの罪を背負って神の呪いを受けてくださいました。
- (2) 第二は、イエスが本当に死んだということです。
- ① イエスの処刑は1日で終わりました。ユダヤ人指導者たちが祭りの日程との関係で、その日の夕方までに終わるよう、総督に依頼したからです。十字架刑は、通常、少なくとも数日間、死ぬまでに時間がかかります。失血死ではなく、体を支えきれずに窒息するのです。死を早めたいときは、足のすねを打ち折って、窒息死を早めます（ヨハネ 19：31）。
- ② イエスは、わずか6時間程度で死に至っていました（マルコ 15：25、33、37）。すねを打ち折る担当の兵士は、イエスといっしょに処刑された二人については足のすねを折りましたが、イエスのすねは打ち折りませんでした。これにより、メシアの骨は一つも砕かれないという預言が成就しました（ヨハネ 19：36）。そのとき、ほかの兵士が、念押しで、下からイエスの脇腹をやりで突き刺し、心臓を破壊しました。これにより、イエスの体から血が注ぎ出されました（ヨハネ 19：34）。窒息死をもたらす十字架刑でありながら、「血を注ぎ出して、命を贖う」（レビ 17：11）という条件が成り立ちました。
- ③ イエスがわずか6時間で死んだというのは、処刑に慣れた総督には驚きでした（マルコ 15：44）。遺体の引き渡しの前に、百人隊長からイエスの死を確認しました（マルコ 15：45）。そして、サンヘドリンの2人の議員が遺体の処置をして、墓に納めました（ヨハネ 19：38～40）。
- (3) 第三は、旧約聖書のメシア預言の成就です。「彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた」（イザヤ 53：9）。イエスの十字架処刑は右と左に二人の強盗殺人犯といっしょでした（ルカ 23：33）。イエスが葬られた墓は、処刑の現場のすぐ近くにあり（ヨハネ 19：41）、その持ち主は「アリマタヤの金持ちでヨセフ」（マタイ 27：57）という人でした。彼はサンヘドリンの議員でしたが、イエスに対する計画や行動には同意しておらず、裁判の会議には召集されませんでした。彼は、神の国を待ち望んでいました（ルカ 23：50～51）。彼はイエスをメシアであると信じていましたが、迫害を恐れてそのことを隠していました。イエスの遺体の下げ渡しを願い出て、ついに彼は信仰を表しました（ヨハネ 19：38）。